

金澤文庫紀行

坪 井 俊 映

今こゝに記さんとする紀行文は不肖七月中旬塚本・惠谷兩先生及三谷先輩と共に旅行せしものゝ一部にして、淺學の身を以て如是き末觀の寶庫に入り、其の藏書を閱覽する事の出來たのは某の最も喜びとする所である、故に此處に其の紀行の一部を記し、其の喜びを讀者諸兄に分け并びに此度の紀行に御指導被下た諸先生及諸先輩諸兄に深重の感謝の意を表すものである。

金澤文庫は古く鎌倉時代より存在せしものにして、足利文庫と並び稱せらるゝものであつて、鎌倉時代の關東に於ける一大圖書館である。其は鎌倉を去る事東方約一里程の所にありて、南方に海を控へ、周圍山に廻られたる稱名寺の境内に其の英姿を見せて居るのである。今金澤文庫について述べるに先立つて、稱名寺の事につきて一語せん。

稱名寺

金澤山稱名寺は其の名の示す如く古は稱名念佛を唱へし所であつたらしく、然しながら現在は眞言律宗に屬して居るのである。而して其の稱名念佛を何頃より停止したか云ふに關東往還記弘長二年二月廿七日の條に

（前略）又去鎌倉不幾有一寺號稱名寺年來雖置不斷念佛衆已令停止畢（以下略）

とあり、弘長二年とは親鸞の寂年にして、其の時は既に停止したのである。而らば何頃よりこの稱名寺が存在し、何頃より稱名不斷の念佛を唱へて居つたかについては、其の詳細不明であるけれども、其の當時の關東の念佛宗の狀態より

推測すれば、或は長樂寺の隆寛の多念義系の寺ではないかと思はれる。而して又隆寛の弟に願行憲靜ミ稱名寺開山審海の關係を示す、血脈の二三が現在金澤文庫に藏せられて居る故に、今其の一二をあけてをこう。

①



②



こあり、然しながら弘長二年には既に念佛は停止されて居つたのであるから、其れ以前の稱名寺は如何なるものであつたかは未だ研究の餘地が十分あるのである。

稱名寺は又彌勒院とも號して、龜山天皇の朝北條義時の孫の實時の本願により、其の孫貞顯の時に到り國寶の稱名寺伽藍古圖に見るが如き巨刹となつたのである。開山は右圖に示す如く審海妙性律師であつて、其の後劍阿³湛睿³實眞⁴什尊⁵次第に移り行つたのである。

今其の歴代の長老について詳細に説明する暇もなく又材料も僅少なる爲に、其の説明は後日にゆづり、今其の相承の關係を示す血脈の二三をあけるだけにして止めておこう。

①

(前略) 不空 — 惠果 — 弘法大師 — 眞雅 — 源仁 — 益信 — 法皇 — 寛空 — 寛朝 — 濟信 — 性信 — 寛助 — 覺法 — 覺性 — 中覺 —

道法 — 道助 — 道深 — 法助 — 頼助 — 益助 — 益性 — 劍阿 — 湛睿 — 實信 — 什尊 — 宗雅 — 隆助 — □ □

(金澤文庫所藏血脉)

②

(前略) 頼助―益助―益性―劔阿―湛容―實眞―什尊―宗雅―隆助―靈辨―寛深―宏離―惟憲―宏惠

(金澤文庫所藏血脉)

③ 理性院血脉

(前略) 眞雅―源仁―聖寶―觀賢―淳祐―元果―仁海―成尊―義範―勝覺―賢覺―賢信―乘印―勝因―覺舜

―真空―日蓮―實性―源舜―性鏡―明源―實眞―素容

(金澤文庫所藏血脉)

④

(前略) 定意―理海―性海―道空―真空―觀俊―宗遍―靜昭―智昭―劔阿

(金澤文庫所藏血脉)

等あり。

又稱名寺は多數の地領を有せし寺にして、正和四年には實時の後室、慈性尼が下總國垣生庄山口郷にて寺田若干を寄進し、元享三年には北條高時が又寺領として數ヶ村を寄附し、後ち小田原北條の時となりて寺領七十七貫文の寄進を受け、其の他徳川時代となりても多數の地領を寄進せられたる事が諸記録の上に見えるのである。而して如是く多數の寺領を有し、北條氏の外護によりて其の蘭菊の美を誇つて居つた稱名寺も、北條氏の滅亡にともなはれたれ、後世猶寺領の寄進あつたにかゝわらず、僅に昔の面影を今日に止めて居るは誠に残念な事云ふべきである。

金澤文庫

金澤文庫は古くは元來現在の位置になく山を越えた陰の谷即ち文庫ヶ谷と稱する所にあり、現在昔の文庫の跡は昭和塾となりて其の遺物が保存せられてあるのである。現在は昔の阿彌陀院と云ふ堂の跡に其の英姿を古松の間にそびえさ

して居るのである。昔は其の阿彌陀院に云ふ御堂のあつた所より壁道がありてそれより文庫へ通つたらしく、何頃か其の壁道は埋まり文庫もすたれ、終に稱名寺に保管せらるゝ様になり、さては其の保管せられた書籍が散佚し、又富士見亭に移す等諸種なる事狀の爲に、現今は古來稱名寺所藏の書籍のみが藏せらる様になり、古の金澤文庫所藏の藏書は僅に其の一部を散見するのみである。抑も金澤文庫は北條實時の創建に傳へるが、實時は前述の如く義時の孫であつて、幼より學を好み清原の教隆と相知る様になつてから、心を政學に傾け、或は書場點校に、或は圖書の蒐集に勉め、彼の晩年に金澤の地に退隱するや、此所に文庫をかまへ多年蓄積したる和漢の書を納れて自他講讀の便をはかつたのであるこれが金澤文庫の初めであつて、其の子顯時、貞顯等皆な其の志をつぎしが、北條氏滅亡にも衰へ、慶長七年に徳川家康文庫の圖書を富士見亭に移し（現在は宮内省圖書寮にあり）が、今尙ほ一萬卷の書あり、これ皆な稱名寺より委託したものであつて、昔の「金澤文庫」と印を押したる書は僅に其の中に散見するのみである。現在金澤文庫所藏の書籍中の整理済のものとしては

冊 子 本 二一四八帖

卷 子 本 九一〇卷

大藏經(宋版) 三四八九帖

折 本 六一一帖

あり、未整理のものを加ふれば一萬卷は超ゆるであらう。

昔し僧義堂が金澤文庫の藏書を見て作つた文に、

觀ニ金澤藏書ニ而作

玉帳修文講武餘遣人來覓舊藏書牙籤映日窺蝌斗縹帙乘晴走蠹魚把上一篇看不足鄰侯三萬欲如何照心古教君

家有收在ニ胸中ニ壓五庫

とあり、古はいかに多くの書籍が藏せられて居た事だらう。

現在金澤文庫の圖書の大部分は佛書にして、其の中眞言、天台、華嚴律、淨土等か其の大部分を占め、その他禪、俱舍、法相、三論、史傳、目錄、經律論疏等あり。

今其の中の淨土教關係の書としては約八十有數部あり、今其の目錄及奥書について述べれば、

無量壽經論註聞書卷上 寫 良聖手澤本一冊

卷頭に

建長八年乙卯三月十一日雨大霰也先例モ難有

卷尾に

建長八年^{丙辰}三月十九日酉時書之

於下總國市蹉庄米倉郷書寫之了

筆師時廿三歲 良聖 花押

郡疑論見聞七卷 寫 良聖手澤本 一冊

奥云 建長八年^{丙辰}八月十六日於常陸國東條床小野郷書寫之了

執筆良聖時年廿三歲也 聖忍 花押

法事讚上卷(缺有) 長西撰 寫 三冊

第四

文永五年戊辰十月十日癸時書了

於洛陽一條萬利小路阿彌陀寺如形書寫了 後見之人々南無アマタ佛一反穴賢

執筆

永源 花押

往生要集鈔 故上人 寫 一冊

奥云 承久二年六月十二日

於越後國府爲往生極樂拭汗書了

校合了

往生禮讚聞書 寫 良聖手澤本 一冊

奥云 康元元年正月十四日

於上總國伊南宿鄉常樂寺書之畢

但此借他人本以寫之

筆師良聖時廿四歲

聖忍房 花押

觀經疏光明抄 一八卷(缺有) 寫 永源手澤本殘缺 五冊

第三

文永六年九月十日巳時書了

於一條萬里小路アマタ寺寫之

第八

文永六年九月廿一日戌時書了

於洛陽一條萬里小路阿彌陀院寫之

第十

文永五年戊辰六月廿四日

執筆 永源春龜廿九

執筆 永源 花押

觀經定善義聞書 寫 良聖手澤本 一冊

建長七年乙卯二月六日讀了中間日數三十六日除闕日八日之定也同聞衆五十人

能化然阿彌陀佛生年五十七也

抑此定善義者建長六年十二月廿日ニ被始談良聖依年始藏末之急劇等不會九日是則同正月四日已後值水想觀終之時也

良聖年廿二歲闕日八日者所謂十二月九日晦日正月一二月同十五日同廿二三日同廿九是也

談處下總國匝瑳鄉飯塚御庄內松崎鄉福岡村也

觀經玄義分聞書 寫 良聖手澤本 二冊

建長七年五月十七日

於下總國匝瑳御庄福岡鄉被談能化然阿彌陀佛五十七

良聖時年二十二歲也

觀經散善義問答 隆寬撰 智慶手澤本 一冊

第二

已上第十四觀文十一門料簡訖

愚老 隆 寬

第四

已上第二深心問答訖

隆 寬 記

第五

已上廻向發願心問答訖

一校了

老愚沙門

隆

寬

貞應元年四月廿五日賜長樂寺律師御房真本以於六波羅密寺內念佛行人生願房中未時爲興隆佛法利益衆生如形寫之了

執事 智 慶

別

建保五年八月廿日亥時許入所偃臥閉眼未結眠金蓮臺現眼前光明照耀其大齊三尺像座其體非盡非造不可思議也心廻今

文料簡令思釋之間有斯瑞仍記

第六

已上上品五生中十一門料簡訖一校了

老 愚

隆

寬

已上上品中生料簡訖一校了

七旬愚老

隆

寬

已上上品下生并句八讚料簡訖一校了

七旬愚老

隆

寬

承久二年六月下旬比重加料簡了

同聽刑部阿闍梨敬白河口□□寺也

觀經立義分聽聞抄 寫 崇順手澤本 一冊

文保三年正月 日

觀經序分義管見鈔 第一・二 寫 崇順手澤本 二冊

第二

元應元年八月十六日校點畢 崇順

觀經定善義管見鈔 第二 寫 崇順手澤本 一冊

元應二年夏下下旬第一日於多寶寺長老坊校點畢 崇順

觀經定善義顯意抄 寫 一冊

建治三年閏三月十七日書了

觀經定善義見聞集 二卷 寫 湛叡手澤本 二冊

卷下

寫本云於鎌倉新善光寺治定了云々 而文言繁闕義理隱覆故今少成改作恣致刪補矣努力々々不可爲指南穴賢云々不可爲寫本也

千時正安二年_{庚子}十月十一日鎌倉淨光明寺慈光院書寫之了

觀經定善義見聞集卷下 寫 十藏手澤本 一冊

嘉元二年五月廿三日一交畢

沙門

湛

容

生年三十
通夏六歲

花嚴宗末學兼淨土沙門釋十藏書

正長四年四月四日

觀經散善義見聞集 二卷 寫 二冊

卷上

嘉元三年五月七日

觀念法門要略記 入阿撰 寫 一冊

建治二年丙子四月十五日書了

四十八願(陸捌弘願釋) 寫 一卷

建長七年拾迄二□□

遺子 應 □

淨土宗要肝心集 卷上 寫 一冊

弘安十年丁亥十月十六日鎌倉名越善導寺ニテ書之處也

淨土三部經大意 源空撰 寫 良聖手澤本 一冊

建長六年甲寅五月十五日於平針鄉新善光寺書了

諸行本願義 念空撰 寫 湛容手澤本 一冊

干時正安二年庚子十一月六日相州鎌倉淨光明寺慈光院所令書寫也

阿彌陀經義疏 元照撰 一冊

沙門 湛 容

建保二年極月八日書了



其の他良聖のものとしては

法事賛卷下(上缺)

一冊

雑要文集

一冊

入阿のものとしては

往生禮讃要略記

寫

二冊

般舟讚要略記(缺有)

寫

一冊

法事讚要略記

寫

二冊

觀經序分義顯意抄第二

寫

一冊

觀經散善義顯意抄

寫

一冊

永源のものとしては

往生禮讃光明抄第二・三寫

崇順のものとしては

觀經立義分管見抄

寫

一冊

觀經散善義管見鈔

元應二年寫

二冊

照寂のものとしては

觀經立義分見聞

寫

一冊

湛容のものとしては

彌陀本願義義

寫

四卷

法事贊見聞集

寫

一冊

西圓の本には

觀經定善義問答私見聞覺終撰

寫 一冊

隆寛系のものには

具三心義

奥云 建保四年二月十三日手自一校訖

權律師隆寛作之

山城宇治郡是野郷如形點了

極樂淨土宗義卷下 承久二年

一冊

彌陀本願義

四冊

長西系には

郡疑論疑芥(缺有) 寫 覺靜手澤本

三冊

其の他

阿彌陀三昧法則

一冊

安樂集見聞抄

二冊

往生裏書

一冊

專雜二條義

長□

一冊

奥云 弘長二年十月七日 未交

選擇集述疑(缺有)

惣別二願抄

奥云 寶治二年三月七日□時計書寫了

生年二十五乘空念

念佛助行要文抄 寶治元年

一冊

これに金澤文庫の墨印あり

淨業記

寫

一冊

淨土宗寺拾帳

寫

一冊

二十願決疑問答(缺有)

寫

一冊

奥云 延慶二年三月十五日

於房州東條書之了

一校了

立義之記(缺有)

寫

一冊

選擇傳弘決疑鈔

寫

一丁

念佛往生傳(缺有)

一冊

これには八人の念佛往生が記されてある、これは表題もなく名稱不明であつたが、金澤文庫の司書熊原政男氏

が其の内容よりつけられたるものなり。

其の他名稱不明なる法語及び宗論の如きもの二部あり。

以上唯單に金澤文庫所藏の圖書の中に必要なものだけを記したのであつて、まだ其の他十數部あり。

之を要するに金澤文庫所藏圖書中淨土教關係のものは大體鎮西、隆寛、長西の三系統に分ける事が出来るのである。

これ等一々についての研究發表は何れ諸先輩諸兄によつてなされるであらう。私は今單にこゝに此の目錄と奥書の一部を記したのみであつたが、これが他日諸兄の其の道の研究に一分の役に立てば私はそれで十分である。

不肖今度金澤文庫に遊ぶ事が出来其の七百年來の藏書を閲覽する事が出来たのは余の最も喜びとする所である、今此所に不完全ながらも其の紀行文を表したのである、やがて諸先輩によりて金澤文庫の新研究の發表され學界に大いに貢獻せられんことを希ふ次第である。